訓練部隊として指揮しない方がよいと思う

編隊訓練の重点は三機乃至三機に置き異体同心的行動を完成しなくてはならぬ然る時は小機九機等の訓練も三機の基礎が十分訓練せられて

居れば危険なく実施することが出来る

昭和三年第一期第四期が編隊戦術訓練を始めたのが嚆矢

昭和三年飛行第一連隊第一中隊第一小隊

翌年即ち昭和四年六月頃から満洲の満州は訓練の好適季節である春樹荘場も近次整備せられ戦隊の空中訓練も一段と活潑になった頃の或日西部国境に紛争事件が勃発し在海拉尔飛行第二十四戦隊が偵察隊と衝突した情報が傳った

国境紛争事件は昭和三年中行事件のせく頻発して居たので乗り同心も持たなかったが日毎に空中戦の規模が拡大し其都度驚異的戦果が報せられ在哈爾濱飛行第十戦隊の一部が参加し益々輝しい戦果が報ぜられ乾坤

も戦闘に

を収めたこと

た然し

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

子事件、張鼓峰事件と同様問題なく終結するものと予想し対岸の火事視して参加各戦隊が何れも假想敵国の戦闘飛行隊に対し快勝を博して呉れることを羨望と心強さとを以て傍観して居た果して大事に至つぬ哈尔濱部隊も帰還した

との情報に接した然るに自ら予想して事件は再燃し在哈部隊は勿論最近内地より移駐して来た飛行第一戦隊と海拉尔方面に出動し在満戦闘隊で当戦隊のみが取残された形である

情報は依然友軍の快勝を傳へて居るが友軍の損傷も日毎に増加し特に指揮官の負傷未帰還が目立つて多くなり漸く輜重を許さない情勢を露呈する様になつた特に北支方面に居た飛行第二十四戦隊が満州移駐の時機を早めて参戦したとの情報を聞くに及んで満を持して居る当戦隊の血の気の多い人々は心中の不満を表面に現はす様になつた戦隊長は「表門の歩哨は通用門の小火の為守地を離れることはないのだ」と一同を戒める

共に他日に備へて訓練に精進せよと勵ました事件発生に伴ひ戰備を嚴にする為隊員の最大の楽しみであった毎月の海浪出発応用訓練も差し控へなくてはならなかったが駐屯地に於ける猛訓練に隊員の精力の捌け口を求める外はなかった

此二、三ヶ月間程高度の訓練を連続したことは第一線者の二十七年間の服役生活中にも稀れであった

戰隊は事変に於ける唯一の戰闘隊であるのみならず装備機種が九五式戰闘機であった為性能的にイー十六に及ばず多数戰を危陽視されて居たのであるが戰隊空勤務者は唯一人として装備機の性能が多少低くとも戰闘に於て列外を取るが如き者を持つたものはなかった

不参加の理由が装備機種にあるのなれば、新京の石明を是正しなくてはならぬと思巻いたしてある所の持込み渦のない憤満は訓練に注がれた

八月中旬の某日午後（日時の記憶がはっきりしないが）ノモンハン事

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
National Archives of Japan

作戦開始日の前日満一ヶ月前の日であったから（八月十四日かと思ふ）飛行第三十三戦隊は所沢より速かに白城子飛行場に前進し白温線に於ける地上部隊の鉄道輸送の掩護を準備せよとの電報命令を受領したこれに基き（動員）命令を傳達すると隊員は直躍した張り切って出動準備に取り掛った

第三章　ノモンハンの戦

第一款　輸送掩護

出発地上勤務員はその日の夜に鉄道に依り白温線平安鎮に向け出発し出動機の整備作業は終夜続行せられ翌朝は戦隊本部三機各中隊九機の出動準備が出来た

先発員の到着を待って午後一時全機離陸出発し白温線平安鎮に於て先発員と合し該地教育部隊の援助を得て飛行準備を整へ中隊毎に三ヶ月間隔を以て平安鎮一泰倫間の地形慣熟の目的を以て白温線沿線を飛行せしめた